

教壇をみて、それぞれの教壇が持っている長所を、具体的に自分のものにしていくには、幾つかの着眼点が入り用です。その着眼点に気付くきっかけは、何と言っても、自分が感ずる自分の教壇の問題点です。そういう所から浮かんでくるいろいろな感想を、ただの感想に終らせない自学の方法を、芦田恵之助先生は教えてくれました。「教式」です。教式で、先ず、種々な感想を要点だけに整理できます。そして、問題点の解決、要点の進歩の方法まで引き出されてきます。

教壇が行われている教室にいて、教師の間に、参会者まで子供といっしょに答を考えてしまいます。このような引き付ける力は、教師の教材（文章）の読み方から生まれます。どの文章にも、作者が読者に訴えようとする「中心」（心）があります。文章は、その中心を根本にして造られています。教師は、その中心を読み取ろうとします。そして、自分が揺り動かされた中心を目標に据えて、子供達と学習を進めていきます。子供達や参会者の気持ちを抑える理由は、先ず、この中心の把握にあるでしょう。ですから、教師が文章の中心を、何に、どの文字語句で、どういう事実と共に読み取ったのか、から考え始めると、多くの長所を探り出すことができます。

教壇をみると、分かり易いと思います。そして、いつも新しいと思います。何時間かの取扱いをみると、時間を追うにつれて深まりを憶えます。そして、又、新鮮なのです。これには、中心を摑む努力の外に、幾つか重要な工夫があるはずで、その第一は、概観の扱いです。子供達全員に教材の中心がよく分かるように、慎重な順序を踏むのです。直ぐ、中心の中には入りません。語句に事実を押さえながら全文の見通しを付け、中心の部分を際立たせて、文章の構成を明らかにしていくのです。子供達は、これで後は、更に文章の内に入って、中心に迫るのみです。

中心の扱いには、普通、何時間かかけます。それは、中心を盛り上げている心の濃密な部分が幾つかあるからです。その部分部分を、一時間ずつ扱います。この時、心を述べている事実を扱うのはいうまでもないですが、全て叙述面の文字語句に表されていますから、心を必ず一字一句に押さええます。

概観、中心の長所を考えるには、問と答で流れを造っていく問題が入りますからちょっと面倒です。が、楽しいものです。概観では、板書の語句から始めてみましょう。子供に分かり易くとの工夫を尋ねていくと、「六とく」を考えることにもなるでしょう。「二とく」は、全文を象徴する扱いです。重要な事に、どんな平易な問で触れているかをみつけて下さい。

中心でも、板書したものが心の濃密な所とした理由を考えてみましょう。そして、心を表した一字一句が、生き生きした心にもえてくる扱いの工夫を突き詰めてみましょう。問で流れを造る工夫、事実の厚味を具体化する工夫があります。

このように考えてくると、読み・案・取扱いに、数々の長所がみつかるでしょう。この取扱いの流れには、同じ繰り返しはありませぬ。まして、後戻りはありませぬ。前進向上の流れです。深く、新しいはずです。どうか、「教式」を反芻して、日々の教壇を充実させて下さい。